

マリモ：はじめに

マリモは、ロシアや北アメリカなど比較的寒い地域の湖や沼で生育する種類の緑色の藻です。アイヌの言葉で、マリモは「トラサンベ」と呼ばれ、それは「湖の御霊」を意味します。日本では、マリモは1897年に阿寒湖のシュリコマベツ湾で、植生調査していた札幌農学校（現在は北海道大学）の学生の川上瀧彌に初めて発見されました。その外見に感動し、丸い形の藻を意味する「マリモ」という名前をつけました。3つの異なる生活体がマリモには存在します。それは、糸状または房状で岩石や貝殻に付着するもの、絡まった状態で水中に浮くまたは湖底に滞積するもの、球状になるものです。直径15cm以上の球状マリモが群生するのは阿寒湖だけです。綺麗な球形に生育するため「阿寒湖のマリモ」は国の特別天然記念物に指定されています。

マリモ：生態

マリモは、北半球の高緯度地方の湖や沼に広く分布する緑藻類の一種で、冷水環境を好みます。また、陰性の植物であり、光の当たりにくい湖の底でも光合成をしつつ、生きることができます。球状マリモは、糸状のマリモ1本1本が集合して形成されています。

マリモ：保護活動

ほかに例を見ない大きさと綺麗な球状が理由となり、1921年、「阿寒湖のマリモ」は国の天然記念物に指定されました。さらに1952年には、特別天然記念物にも指定されています。発見当時は阿寒湖内4箇所に見られましたが、西岸の2箇所のマリモの生息地は、木材搬送によって湖に土砂が流入し、1940年代までに消滅しました。さらに、残された2箇所の群生地も、多くの観光客が阿寒湖に来てマリモを持ち帰ったことや水力発電による過度な水位低下などでマリモの数が減り続けました。1950年、阿寒湖の湧水によるマリモの大量枯死をきっかけに、地元住民がマリモを保護するために集まり、「マリモ愛護会」(現在は「マリモ保護会」)を設立しました。彼らはまりも祭りを開始し、阿寒湖から持ち帰ったマリモを返すよう日本中の人々に呼びかけました。この祭りでは伝統的なアイヌの儀式も行われます。今では、まりも祭りは阿寒湖を代表する行事の1つとなり、マリモについて知り、保護について考えたり、アイヌ文化に触れる行事として地域内外の人々を魅了しています。また、子ども達を対象としたマリモ観察会や打ち上げられたマリモを湖へ返すなどの様々な活動も続けられています。